

## ブブノーワさんの思い出

奥村 剋三

年をとったと痛感することが多いこの頃だが、そのなかでもとりわけ悲しいのは、心の中で大切に思っている人びとの訃報に接する時である。日々顔をあわせる人は別だが、なつかしい人、大切な人の思い出は漠々たる記憶の霧に沈んで、なにかの折にどうしておられるかと一瞬気がかりになるものの、また日常の雑事にまぎれて失念してしまう。ある日の新聞が突然その人の死をつたえる。愕然とすると同時に、万感胸にあふれて昔日のわが心の在り様がよみがえってくる。

昭和30年代のはじめ、まだ「戦後」があらゆる分野に色濃く残っていた。その頃はじめて東京へ出て、早稲田の大学院に入った。米川正夫、岡沢秀虎、除村吉太郎といった、今では鬼籍に入っておられる高名な先生がたの話を通じてきいたのは大きな幸せであった。女流画家ワルワラ・ドミートリエヴナ・ブブノーワもその一人である。今も鮮かに思い出すのは小柄な体を元気よく、教室に運んでこられた若々しいご様子（しかし当時すでに70に近いお年だったと思う）。ブブノーワさんはいつも、きれいなロシア語で明快に語った。私たち院生はそのときプーシキン『オネーギン』の講義をうけた。この韻文小説の一語一句が、ブブノーワさんの説明で、魅力あふるる生き物のように私たちの心にとびこんできた。

ブブノーワさんの授業を熱心にきいたのは一年間だけだった。若さというものは無思慮なもの、怠けものの私は二年目には時たましか授業に顔をださなかった。たまたま廊下でばったり顔を合わせたりすると、きまって『ダヴノー・ニュ・ヴィージェリシ』（ずいぶん顔を見なかったわね）と声をかけてこられた。

ブブノーワさんは、1958年にソ連に帰国され、妹の小野アンナさんと黒海沿岸の町スフミにおすまいになった。1976年の夏、雑誌『ソヴェート文学』の編集打合せのため訪ソされる黒田辰男先生に同行して、私もモスクワへでかけた。モスクワで同誌編集局のイリーナ・コジェーヴニコワから、私たちの滞在プランの中にスフミのブブノーワさんを訪問することが入っていることを知らされた。

ほぼ20年ぶりにあったブブノーワさんは、小柄な体がいっそう小さくなり、もうあの若々しい挙措こそ見られなかったが、露ほども邪気をやどさぬ美しいつぶらな目は元のままであった。同居のアンナさんがしきりに日本語でとりとめもないことをおっしゃるのにくらべて、ブブノーワさんはことば少なであるが明快に筋道のたった話しぶりであった。彼女のアトリエには、はっと驚くほど美しい色調の人物像や自画像が画架にかかっていた。グルジア共和国の名誉芸術家である彼女の住居を、この地の文化人がたえず訪問している様子で、その日も数人の人たちがいて、にぎやかに私たちを歓迎してくれた。私にとって一番うれしかったことは、「おぼえておられますか」とブブノーワさんにきいたとき、その顔には見おぼえがあるとおっしゃったことだった。

3月の終りの、ある日の新聞が彼女の訃報をのせた。その記事に付された写真の顔は、スフミで再会したときのブブノーワさんを思い出させてくれた。しかしそこからは、早稲田の教室で弾むように活発に話しておられたブブノーワさんの面影はもどって来なかった。明晰な知性をうかがわせる力強い語調ももどってはこない。だがそれはきっと、私をふくめて、あの教室にいた誰やかれやの心の中に、今も生々と住みついているにちがいない。(1983. 4. 24)

立命館大学教授・茨木支部長

(日ソ協会大阪府連合会茨木支部機関紙『ネヴァ』No. 33より転載)